あすへ

あの夏から51年

4

同胞の「恨」、自らの「戦争責任」たどる

スクリーンに大写しになった老女が、望郷の思いを押し殺すように静かに口を開く。

「今さら国に帰っても知ってる人もいないし……」

穏やかな表情。深いしわは嘆きと憤りの数だけ刻まれているのかもしれない。

今月四日、京都府向日市の中央公民館。「平和と人権を考える講座」の一つとして、沖縄の朝鮮人従軍慰安婦や軍夫の実態を描いた記録映画「アリランのうた――オキナワからの証言」が上映された。

上映会のあと、講師として招かれていた監督の朴寿南（パクスナム）さん（六〇）（神奈川県茅ヶ崎市）が訴えた。

「慰安婦たちは国に管理され、日常的に強姦、輪姦を強いられた被害者だ」

「売春婦幻想を打ち破らない限り、彼女たちの復権はあり得ない」

朴の推定によれば、沖縄にあった慰安所は二百か所以上、送られた朝鮮人女性は千人にのぼる。

映画で証言する老女もその一人。名前はペ・ポンギ。朝鮮半島の貧しい農家に生まれ、二十九歳の時、見知らぬ男に「仕事をしないで金がもうかるところがある」と声をかけられた。

釜山で船に乗せられ、一九四四年十月十日の那覇大空襲直後の沖縄に到着。そのまま特攻艇基地があった慶良間諸島・渡嘉敷島に送られ、翌年、米軍が上陸するまで日本軍兵士の相手をさせられた。

在日二世が慰安婦記録映画

朴は沖縄に送られた同胞に関する証言を求め、八九年から沖縄で、韓国で、日本各地で、かつての慰安婦や軍夫、日本軍兵士を前に約十一万㍍のフィルムを回した。

三年の歳月を経て映画は完成。以来、各地で自主上映会が催され、約二十万人が証言を聞き、見つめてきた。朴も可能な限り上映会に顔を出し、製作意図や一時間四十分の映画に収めきれなかった話を観客に語ってきた。

朴は在日二世。幼いころからさげすまれながら、敗戦を「解放だ」と喜ぶ同胞を横目に「なぜ日本人と一緒に泣けないんだ」と悔しさを募らせる皇国少女だった。

「もし、男だったら、特攻隊に志願していたでしょう」。屈折した思いが朴の胸に去来する。

「体制の論理を日本人以上に受け入れることで差別する側に認めてもらいたかった。そうすることで人間以下の差別から人並みの扱いを受けたいと考えていたんでしょうね」

証言集め3年…各地で上映会

朴は国を奪われた「被害者」でありながら、皇国臣民として「加害者」の側にもいた。映画製作は同胞たちの「恨（ハン）」を明らかにすると同時に、あの戦争の一端を担ってしまった自らの戦争責任をたどる旅でもあった。

「夫や息子を亡くし、私も戦争の被害者なんです」

講演会などでこんな声を耳にする。朴には違和感がある。

「妻として、母として戦争に組み込まれてしまった責任を一人ひとりが自覚しないといけない。そのことを棚上げにしては、また同じ道を歩んでしまう気がする。それが怖い」

（敬称略）

▲朴寿南は上映会場で従軍慰安婦らの「恨」を訴え続ける（4日、京都府向日市の中央公民館で）